

# 中級レベルの学生を対象とした日本語の基礎力補強クラスの試み — 学生自身による問題の意識化をはかる —

遠藤 かおり  
ENDO, Kaori  
徳島大学国際センター

要旨：共通教育「日本語1(前期)・日本語2(後期)」では、最近、学部留学生や交換留学生の日本語力の低下が目立つようになってきた。そこで、大学生として必要な日本語の基礎の学び直しに力を入れてきた。大学で必要とされる日本語での表現力の強化を図るとともに、日本語そのものを見直し、その後の活動がスムーズに遂行できることを踏まえ、授業を行った。その取り組みを報告する。

キーワード：日本語教育、アカデミックジャパニーズ、表現力の強化、語彙力、問題の意識化

## 1. はじめに

日本語能力試験1級、2級取得者である留学生であっても、近年多く見られるのは、自分では自信を持っているが実際には問題が多く、日本語力が不十分で、大学の授業に対応できるだけの実力が備わっていないと思われる学生である。先ずはその問題に気付かせ自ら直さなければと思わせることが重要となった。関連教科でも十分でないとの声もあり、本コースを日本語の基礎を再確認する強化クラスとして位置づけ、「話す・聞く・書く・読む」の四技能のうち、「書く」ことを主とした。大学で要求される日本語とは、つまりアカデミックジャパニーズ(レポート・小論文を書く、プレゼンテーションなど)であるが、その基礎となる部分の習得、また、日本語の基本的な構造に深くかかわる文法項目の見直しと強化を目指した。と同時に学生の不自然な日本語や、使い慣れた日本語の間違いなどにも気づかせ、より完成度の高い実力を付けさせることで、誤解を招かない伝わる日本語の補強を軸に授業展開をした。

## 2. クラス運営

### 2.1. 対象とした学生

年度	学期	総数	内訳
2011年度	後期	4名	中国3 韓国1
2012年度	前期	6名	中国4 マレーシア2
2012年度	後期	8名	中国7 マレーシア1

プレイスメントテスト(注1)を実施した結果、2012年度の前期学生の場合、中国4名のうち、1名は中級の中(日本語能力試験1級取得者)で、他2名は中級の下と見られた。日本語能力試験は受験経験者であった。残り1名は中級の下だと思われた。マレーシアの学生は2名とも国費留学生で中級の下だと思われた。

### 2.2. 主な共通する問題点について

#### 2.2.1. 問題点の例

日本語の基本的な構造に深くかかわる部分の間違いや理解にかなりの推測を要する文を実際の作文例から見てみた。

#### ①文法面

- ・実は私の出身が台湾の台北です。
- ・夕方町を歩いてみると、多くの人は家族といっしょに散歩する風景が見える。
- ・冬るとき、昼でもそんなにさむくなるのはぜんぜん思わなかった。
- ・留学するのは言葉を学べるだけでなく、たくさんの友達が作れるはずで
- ・みんなは全く違う文化を体験するほうがいいと言ったが、私はそう思いません。
- ・町中はほとんど紙一つ落とさないです。
- ・「徳島の人がこんなに静かさが好きでしょうか」と私はこう聞きました。
- ・私は留学生なので、日本の道がわかっていない。

#### ②語彙面

- ・もし来れば、絶対にこの洛陽という町に愛することになります。
- ・グローバル化とともに、海外経験があるひとのほうが独特な考え方を持って、進出に力になれると見られているからです。

- ・人間は社会的だから、メールも手紙もない世界は寂しいに決まっている。
- ・手紙なら、時間も手数もかかるし、いつ届くかわからない。
- ・ただの50円ですが、お金で買えない幸せが届かれると思う。
- ・メールも知らず知らずに古くから使われていた手紙の代わりに注目を呼んだ。
- ・iPhoneには機能が充実しているにつれ、電源にも高要求がある。
- ・適当に利用すると、iPhoneはきっと助けになると思っている。
- ・正確的にiPhoneやスマートフォンを使用したほうがいいと思う。

### ③表現面

- ・スマートフォンは人々の生活に便利をもたらすものだが、自分の時間を合理的に支配のことも大切だと思う。
- ・最初は本屋として経営していますが、発展しているとともに、今はデパートも経営しています。
- ・書き手の姿も手紙を読んでいるうちに、頭に浮かべる。

### 2.2.2. 問題点のリスト化

2012年度前期の学生の場合、特に以下の項目に弱さが見られた。

- ① 助詞 (例:「は・が」「で・を」「を・に」「を・が」の誤用)
- ② 接続詞 (例:「そこで・また・このように」など、接続詞と文構成)
- ③ 指示詞 (例:文脈指示「こ・そ・あ」「こんな」「そんな」の誤用)
- ④ 呼応表現 (例:主語との呼応「～は…ことである」「～点は…である」「～みると、～がわかる」、接続詞との呼応「つまり…である/ということである」、副詞との呼応「徐々に…している/てきた」などの文末との関係)
- ⑤ 時間の表現 (例:「住んだ学生/住んでいた学生」「覚悟したのに/覚悟していたのに」「帰ろうとするとき」などの誤用)
- ⑥ 語彙 (例:違さ・遊びところ・のんびり的な・小型運動会・独立性(自立心)・手数(手間)などの名詞化及び語彙選択の誤用)

また、後期の学生には上記の項目に加え、以下の項目に弱さが見られた。

- ⑦ 自他動詞
  - ⑧ 描写表現「ている」「である」
  - ⑨ 話し言葉と書き言葉
- 更に、全学生において表記の面で「句読点」や原稿の書き方にも問題が見られた。

### 3. 学習項目の決定

アカデミックジャパニーズの基礎的な部分を習得する過程で、文法の基本的な構造の補強が必要であった。上記の問題点より、学習項目の決定をした。教師側はあらかじめ、重点となる項目を想定し授業内容を準備しているが、その期の学生のレベルも考慮して、学生に応じた最重点項目を構成し組み込んでいった。以下のことをねらいとした。

- ①基本を踏まえ、適切な表現を身につける。
- ②自分の日本語能力の弱いところを問題とし、意識化する。
- ③内容を正確につかめ、かつ正確な情報発信ができる。
- ④他のクラスにおいて、スムーズに活動ができることを想定し、論理的な文構成ができる。

### 4. 実際の授業展開

#### 4.1. 流れ

授業は最初から教科書は使わずに、まず学生が言いたいことをそのまま表現することからはじめた。学生の書いた文章から共通の間違いを見つけ、問題点の共有をし、他の人の発想から学ぶことも視野においた。優先順位を決め、毎回の項目とした。

#### 4.2. 実施内容

学生自身による自らの日本語力の問題の意識化を念頭に、先ず学生の知識の呼び起こしからはじめた。用いたのは学生自身の事柄を始め、時事問題を含む身近なテーマまでを取り扱った。

##### ・前期

- ①「私のふるさと」
- ②「留学について自分の考え」
- ③「留学について日本人の考え」
- ④「留学に関する新聞記事を読んで」日本経済新聞
- ⑤「ペットのあり方」

##### ・後期

- ①「徳島へ来て気がついたこと」
- ②「インターネットについて」
- ③「国の教育制度と私の学校」
- ④「高機能携帯電話の功罪」

## ⑤「手紙とメール」

まず、前期後期とも、①のテーマでは、「助詞」「自他動詞」の問題の所在を意識し、教科書でルールの確認をしたあと、具体的な練習をした。(以下使用教科書：石黒圭・筒井千絵(2009).『留学生のためのここが大切文章表現のルール』,スリーエーネットワーク)特に、「自他動詞」に関しては、基本的な語彙を定着させるため、イラストでその違いに着目させ、語彙表を作った。また、漫画の一場面を描写することで「ている」「である」の表現を印象づけ、自然な日本語の訓練をした。前期②③及び、後期②③④⑤のテーマでは活用の間違いや不適切な時間の表現などの意識化を図った。また、文章に必要なものがないために、読み手に誤解を与えたり、不必要なものがあるために混乱が起きるような表現が見られたため、「接続詞」「指示詞」「呼応表現」「時間の表現」について教科書での確認と指導を行った。

次に、自分の意見や考えを述べる際、的確な語彙の選択をすることと、言いたいことが伝わる表現のために、読み手を意識した表現に焦点を当てた。そのために、例えば、前期のテーマ④で取り上げたような新聞を使った授業をした。ある箇所を空欄にして、表現の推測の訓練をした。それまでクラスではそのテーマについて時間をかけ意見をまとめたり、日本人の聞き取りを報告したりしてきた内容であるが、発信者としてではなく、読み手の立場としてどのように受け取るか、その表現を考える場とした。

更に、終盤はデータや資料を使った表現を取り上げ、分析の説明の基礎を学ぶとともに、わかりやすい論理的な文章の構築と表現を目指した。後期は年末年始を挟んだため、日本の習慣である年賀状をめぐる最近の傾向を取り上げた。教科書で基本となる表現を学習した後、日経新聞やマーケティングリサーチのアンケート調査のグラフを元に、読み取り練習を行った。

## 5. 実施状況

2011年度前期は該当する留学生がいなかったため開講せず。半期ごとに修了するシラバスであるが、基本的に1年を通して組み立て内容は重複しないようにした。そのため、学生には日本語1(前期)・日本語2(後期)を通して受講することを勧めた。

## 6. 学生の傾向とその対策

2012年度後期の中国の学生のうち1名は、日

本語能力試験2級を取得しているにもかかわらず、コース開始時にはその実力が伴っていなかった。初回にプレメントテスト(注1)を行ったところ、日本語力がかなり低く、基本的な文法が身につけていないことが判明した。コースについていけるのか心配もしたが、大学院の学生であり、その学生にとって必要な学習内容であることと、真面目な取り組みとから、しばらく様子を見ることにした。幸い後期のコースであったため、冬休みを利用し、対策として初級レベルの補足的な復習問題(注2)を与え、このクラスでも補えないほどの基本的な文法、形容詞、動詞の活用の補強をした。休み明けにはそれなりの効果が現れ、その後の伸びは著しかった。優秀な学力を持っているにもかかわらず、日本語力の問題で損をしている学生が多いのである。ちなみにこの学生は最終項目の授業で、データと情報の読み取り・分析においてどの学生よりも教師の指示を理解し、的確に表現をした。

## 7. 実施上の問題点

意見文を書かせた場合、問題となったのはインターネットにより検索した文章の写しである。授業中に書かせる時間がない時は宿題にするが、その内容が実力を上回るほどの完璧さであった。他人の文章を写すという行為は日本人学生においても問題行為であるが、ライティングの授業でそれをすれば自ら文章を構築する力も適切な語彙選択をする力も養われない。しかしここで指摘したいのはネット上に書かれている全文を写しているのではないということである。どうも学生に不似合いなほど完璧な表現であると思い、試しに検索してみると、全く同じ一文が出てくる。より良い表現を求めて、模倣から学習することも意味はあるが、そのものの意味・使い方を理解せず、いたずらに利用したのではその場しのぎの行為であろうし、何も向上はない。別の試みとして、学生自身にしか書けないことや学生が過ごしてきた環境について述べてもらうことにした(上記後期のテーマ③)。案の定、未熟な箇所が続々とあらわになった。

## 8. 振り返り

本コースにはきちんと学習したいと望んで参加するものもいるが、ほとんどの学生は自分の日本語力にある程度の自信を持って参加する。しかし、このクラスにおいて、徹底的に見直しをされ、各自の問題の意識化をすることになる。それがこのコースのねらいであるが、そ

ここで改めて自分の日本語を見直そうと取り組む者と、そうでない者が出てくる。前者はその問題点に積極的に取り組み向上を図るが、後者は自分の問題を意識化することにそれほど意義を見出せず、向上を図ろうとする意欲が少ない。各期、少なからずも後者のような学生が存在する。そういった学生は、課題に対して無難な文章を書くことで乗り切ってしまう。教員から見ると、実力はあるが深い思考をせず、単純な文章でよい評価をもらうことだけにとどまっているように思わざるを得ない。今回の試みではそのような学生の意識改革をも視野に入れた。今後について学生の更なる満足度を計るための授業内容、およびクラス運営に更なる課題を見出した。

## 9. 終わりに

### 9.1. 学生の声と振り返り

学生の声は以下のものであった。少々表現の不確かなところが残るが、抜粋して、原文のままを掲載した。

- ・自分の日本語の弱いところはやはり、言葉の数や場面に合うような表現が足りないと感じた。
- ・書き言葉や表現と話し言葉や表現の練習、グラフの説明などはとても役に立った。
- ・自動詞と他動詞の復習で、自分ももっとはっきりその違いを感じた。毎週作文を書くことで、書く能力が自然に伸びたと思う。
- ・これからは言葉と表現のことは、日常生活で、日本人や先生の言い方をよく聞いて、自分ならこういう言葉や表現を使うかどうかをよく考えて、日本人や先生の言い方を覚えるつもりだ。
- ・自分の日本語力は本当に低いと思う。基本的な知識も弱い。授業で先生の話が分かるが自分の考えはきちんと説明できない。苦しい。授業は私にとってとても役に立った。重要な知識で、授業中に集中しなければならなかった。
- ・自分の弱いところといえば、やはり自動詞と他動詞、センテンスの語尾の処理と作文を書くことだ。
- ・自分にとっては、復習するという習慣が無いのは問題だと思う。習ったことをすぐに復習しないと、忘れることになるので、定期的に復習しなければならない。
- ・私は意味の近い言葉の使い分けに迷っているということがわかった。文の終わりのところでどんな文型が適当であるのかについても弱いと感じた。図表の分析方法はとても役に

立つと思う。他の授業でアンケートの結果の集計が必要なときその分析方法が役立った。

- ・私の日本語能力は最も良い言葉を選ぶことが弱い。そして、話し言葉と書き言葉を区別する方法もよくわからなかった。また、作文や論文を書いているとき漢字で書くのはあまり好きではない。そのせいで、漢字はいつも忘れてしまった。このように今から漢字の練習をしたりもっと漢字を使ったりするつもりである。

### 9.2. 教師としての考え

このような声からも、学生が自身の問題を見つめなおし、今後の学習のあり方を意識したことは評価できるであろう。中級レベルになると、学生が弱いと感じている部分はいくつかの項目で共通している事がわかる。特に、語彙力不足、言葉の使い分け、モダリティに関する事項、自動詞・他動詞、また似たような表現の使い分けなどである。授業で扱えるのは僅かであるが、学生が自分の日本語を何度も見直し、その間違いに気づき、推敲しようとするのが最大の学力向上へとつながる。教員は的確に指導する必要性を感じた。今後もこのコースが学生たちの問題の意識化を助け、道具としての日本語に自信を持たせる礎になることを目指すものとした。

### 9.3. 課題として残るもの

できるかぎり個々の学生の文例を取り上げ、一人ひとりの問題点に対処する内容で進めた。が、時間的にかなりの制約を要した。

また、語彙力強化対策として学生に語彙ノートを作成を提案したが、その継続に対して十分に目が届いていなかった点に課題が残った。自発的な学習をいかにサポートするかを考えてみたい。

今回の取り組みでは4技能のうち「書く」技能を主に授業を展開させたが、学生の中には「話す」に不安を抱えているものもいて、要望があることもわかった。生活上の「話す」能力には困難を見せないが、課題を遂行する過程でのコミュニケーションにおいて、意思表示や感情表現に推測を要する。今後はその点も考慮した授業展開の可能性も考えたい。

注1. 友松悦子・和栗雅子(2007). 『中級日本語文法要点整理ポイント20』, スリーエーネットワークから抜粋

注2. 友松悦子・和栗雅子(2004). 『初級日本語文法総まとめポイント20』, スリーエーネットワーク

#### 参考文献

- ・石黒圭(2009)『よくわかる文章表現の技術Ⅰ  
(表現・表記編)【新版】』, 明治書房
- ・石黒圭(2009)『よくわかる文章表現の技術Ⅱ  
(文章構成編)』【新版】』, 明治書房
- ・石黒圭(2005)『よくわかる文章表現の技術  
Ⅲ(文法編)』, 明治書房